

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
たてべ 建部 つたえ 傳	男 性	1 5 歳	富岡中部

かいぐんこうしょう  
「豊川海軍工廠から海兵団へ」

し がん  
○ 富岡国民学校から海軍志願

昭和19年9月、富岡国民学校高等科2年生（現在の中学2年）の時、海兵団を志願しました。新城国民学校で海軍志願兵学力試験が行われました。富岡から海兵団を受験したのは私一人でしたが、他の学校からは結構大勢来ていました。各教科の学力試験の他に、体力測定や視力、聴力検査などもありました。志願しようと思ったのは、当時の戦争への士気をあおる風潮と、学校へ軍人さんが来て勧誘されたことが大きかったと思います。個人的に勧められた覚えはありませんが、当時は海軍へ志願するのは、あこがれのような風潮がありました。学校では喜んでもらえたように思います。人数の割り当てがあつたのかもしれませんが。

私の父親は早くに病死、二人兄弟の兄は志願兵で出兵していましたので、母は海兵団への志願を強く反対しました。おばあさんも「困る」と言って反対しました。私は、受けてもきっと合格はしないだろうと思って志願しました。

がくと どういん  
○ 海軍工廠へ学徒動員で

昭和20年1月末だったでしょうか、高等科2年生は豊川海軍工廠へ行くことになりました。工廠へ動員されたのは男子だけで、20名全員だったと思います。

海軍工廠では、富岡国民学校の生徒は全員寄宿舎に入りました。寄宿舎は最初は豊川駅の近くでした。



昭和20年3月 富岡国民学校高等科卒業生

仕事は、北東門近くに機銃部の作業場があり、鉄板をヤスリで磨いていました。そんなに難しい仕事ではありませんでした。まだ13、4歳の子どもですから、それほど厳しく指導はされなかったのだと思います。

3月31日に卒業式が工廠で行われました。富岡国民学校の橋本豊校長先生が工廠までみえて、卒業証書を手渡してくれたのです。

卒業後は、そのまま工員養成所見習工員として働くことになりました。寄宿舎は、現在の名鉄諏訪駅の少し西にある宿舎に替わりました。宇理小の子も同じ寄宿舎でした。

寄宿舎での生活は、あまりいい思い出はありません。学校からの引率<sup>いんそつ</sup>はなく、先生は来ませんでした。先輩<sup>せんぱい</sup>の工員が各部屋に一人つき、軍隊式に訓練をされました。私たちの部屋は、比較的小となしい工員だったためか、他の部屋の工員が来て、いろいろ指導をされました。掃除のやり方や整理整頓など、日常生活に関わることでそのやり方が悪いと指摘されると連帯責任になり、今でいうリンチのようなことが行われたのです。精神注入棒（バッテリー）でたたかれたこともあり、廊下に並ばされて、何度かなぐられました。

寒い時期はいいのですが、暖くなるにつれてノミやシラミに悩まされるようになり、食事<sup>しつそ</sup>も質素<sup>しつそ</sup>でひどいものでした。麦飯よりもっとひどい食事でしたが腹が減るので、我慢<sup>がまん</sup>して食べるようにしていました。

同級生はみんな終戦まで海軍工廠に残ったはずですが、幸いなことに全員無事でした。しかし、1学年上の新田の人は空襲<sup>くうしゅう</sup>で亡くなりました。同級生は遺体<sup>いたい</sup>の処理<sup>しより</sup>などの後片づけの手伝いをしたのではないかと思います。

## ○ 海軍工廠<sup>おおたけかいへいだん</sup>から大竹海兵団<sup>あかがみ</sup>へ

昭和20年5月に入り、赤紙<sup>あかがみ</sup>が家に届きました。寄宿舎へお母さんが知らせに来ました。5月25日までに大竹海兵団に行くことになっていました。予想外のこと<sup>りようちよう</sup>でびっくりしました。赤紙を寮長<sup>りようちよう</sup>に見せて手続きをしてもらい、すぐ退廠<sup>たいしよう</sup>することになりました。1週間ぐらいの短い期間で急いで準備です。新しい服を母が仕立ててくれました。強く反対していた母のことです。何も語りませんでした。兄に続いて<sup>しゆつせい</sup>の出征となり、母の気持ちは痛いほど分かりました。



大竹海兵団跡の碑

出征前には近所の人たちが集まり、食事をしながら送り出しの用意をしてくれました。出征の日、新城駅を朝5時の電車<sup>でんしゃ</sup>で出ることになりましたので、兵隊送りは前日に行われました。車神社へは高等科の生徒が全員そろって行き、もう一人の出征される方と二人で武運長久のお祓い<sup>はら</sup>やご祈祷<sup>きとう</sup>を受けました。車神社から国民学校前まで隊列を組んで歩き、正門前で校長先生が激励<sup>げきれい</sup>のあいさつをされました。出征の日、朝早くから近所の人<sup>ひと</sup>が自転車で新城駅まで来て、見送ってくれました。これが最後になるかと思いました。

大竹海兵団に入って間もなくのことです。戸籍謄本<sup>こせきとうほん</sup>を家から取り寄せるように言われ、届いた謄本を見ると、兄貴の名前の頭<sup>ぼう</sup>に亡の文字が入っていました。それで兄の戦死を知りました。兄は満州に駐留<sup>ちゆうりゆう</sup>していましたが戦局の悪化もあり、

台湾に移動，そしてサイパンへ向かう途中，輸送船が敵艦に攻撃されて沈没し，戦死しました。昭和19年3月1日の死亡通知が残されています。

広島の大竹海兵団は，1班が20名ぐらいで編成されました。海兵団というのは，本来は軍艦乗り込むための基礎的なことを身につけることが目的です。しかし，それらしい訓練はほとんどありませんでした。戦局の悪化が影響していたようです。海兵団での教育内容は，午前中は国語，数学，体育などの教科の学習が中心で，午後は銃を持って歩伏前進，水泳訓練，手旗信号などの訓練がありました。水泳の訓練では，着衣のまま立ち泳ぎや横泳ぎ，遠泳，潜水などをしましたが，泳げない子は気の毒でした。岸壁から飛び込まされ，溺れそうになると仲間が助けるという繰り返しでした。

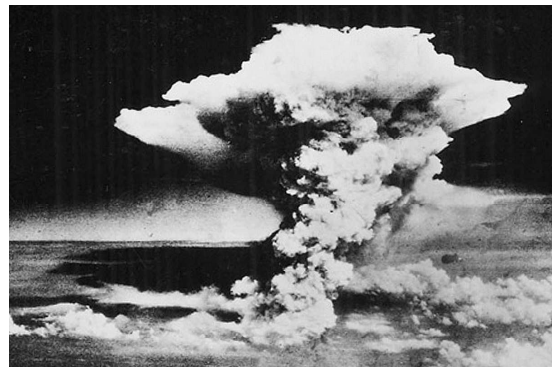
海兵団といっても，陸上での訓練や横穴防空壕を掘る作業などをやらされました。終戦近くになると防空壕掘りが一番大変でした。砂地なのか上から砂がよく落ちてきました。いつ生き埋めになるか，そんな不安を抱えながら掘り続けました。機材を保管するための防空壕だそうで，20名が交替で掘りました。場所は，大竹から山口県に近い山中です。

## ○ 原爆投下から終戦へ

8月6日の原爆投下のことはよく覚えています。朝の8時15分頃，教室で勉強中でしたが，閃光があり，校舎が爆風で大きく揺れたのです。地震のようにガタガタ揺れたので，机の下にもぐったことを覚えています。揺れが収まってから運動場に出ると，キノコ雲が出ているのを見ました。広島までは20kmぐらい離れていましたが，とても大きく見えました。初めて見る雲で，何か分からずただ恐ろしいような気持ちになったことを覚えています。あんな被害があったとは想像もつきませんでした。

8月15日は，玉音放送はほとんど分かりませんでした。上官からの説明で無条件降伏したことが分かりました。その時は「やれやれ」というのが正直な気持ちでした。

8月25日に大竹を出て，帰還しました。軍から缶詰などのわずかな食品をもらいました。大竹から貨物列車に乗って帰還することになりました。途中，広島を通過する時は，窓を閉め，絶対開けないように言われました。放射能を警戒したのだと思います。ですから広島は全く見ていません。大阪まで貨物列車で行き，客車に乗り替えて豊橋まで行きました。豊橋の町は空襲を受けた後で，駅舎は焼け落ちていました。あたり一面焼夷弾により焼け野原になっていました。



原爆きのこ雲 広島から約80km地点で米軍撮影

飯田線に乗って新城まで行きました。新城で自転車を借りて家に到着したのは、8月26日の夜でした。連絡なしでいきなり帰ったので、びっくりされました。家には母とおばあさんがいました。真っ黒な顔で、別人のようだと言われました。母は、顔をくしゃくしゃにして、私の汚れた手を取って喜んでくれました。私は、生きて帰ることができ、親不孝をせずにすんだとほっとしました。

### 海兵団とは

旧海軍が各鎮守府（軍港）においた陸上部隊で、軍港の警備と新兵の教育にあたった部隊。海軍の場合、新兵は海兵団に入団し、その練習部でおおよそ数か月の基礎的な訓練を受けたのち、実施部隊に配属される。

大竹海兵団は、昭和15年（1940）に呉鎮守府の呉海兵団の分団として設置され、翌年に大竹海兵団として独立しました。大竹海兵団では、海軍兵として志願・徴兵された15万人以上の新兵が、基礎教育と訓練を受けたと言われています。

## ○ 補足 富岡国民学校の様子

私たちの学校時代は勉強どころではありませんでした。昭和19年の終わり頃には、本土防衛のために怒部隊が洞雲寺に駐屯するようになりました。洞雲寺の山の中に車輛を隠すために穴を掘っているのを見たことがあります。勉強も作業が多くなり、小畑の山へ入って割り木を背負子で運び出したりしました。体育の授業では手旗信号をよくやったり、竹槍訓練もやりました。